「ごんぎつね」（光村図書　四年）教材分析表　東京都小学校国語教育研究会　読むこと部　令和八年十一月

場面	概要
１プロローグ ちょいといたずらがしたくなったごん	**ごんの人物像** ・山の中に住むごんぎつね ・ひとりぼっちの小ぎつね ・あたりの村へひとり出てきていたずらばかりする。 **雨上がりのある日** 川の中で兵十がはりきりあみでうなぎやきすをとっていた。ごんはちょいといたずらがしたくなり、魚を川に投げこんだり、うなぎの頭を口でくわえたりした。その様子を見た兵十が、「ぬすっとぎつねめ。」と、どなり立てた。
２兵十のおっかあの死を知り、いたずらを後悔するごん	**十日ほどたった日** 村の墓地の六地蔵さんのかげから、白い着物のそうれつを見た。兵十が白いかみしもを着て位牌をささげている。「死んだのは兵十のおっかあだ。」 その晩、ごんは穴の中で「あんないたずらをしなければよかった。」と考えた。
３うなぎのつぐないをするごん	**赤い井戸のところで麦をとぐ兵十** 「おれと同じひとりぼっちの兵十」と思い、いわし売りのいわしを兵十のうちに投げ込み、うなぎのつぐないに一つ一つのことをしたと思った。 次の日もその次の日も、くりや松たけを兵十のうちへ持ってきた。
４兵十と加助の後をつけ話を聞くごん	**月のいいばん兵十と加助の話** 道の片側にじっとかくれていたごんは、兵十と加助の後をつけていき、二人の話を聞いていた。「お念仏があるんだな。」と吉兵衛のうちの井戸のそばにしゃがんで待っていた。
５つぐないがわかってもらえず引き合わないと思うごん	**二人の話を聞こうと思ってついていく** ごんは、兵十のかげぼうしをふみふみついて行った。「それは、神様のしわざだ。毎日神様にお礼を言うがいい。」と言った加助の話を聞き、ごんは「こいつはつまらないな。」「神様にお礼を言うんじゃ引き合わないなあ。」と感じた。
６兵十に撃たれて倒れるごん	**その明くる日もくりをもっていく** ごんは兵十のうちのうら口からこっそり中に入った。うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、またいたずらをしに来たな。と、兵十がごんをドンとうった。ごんはばたりとたおれた。 **ごんにかけよる兵十** 兵十は、土間にくりがかためて置いてあるのが目についた。「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずいた。 兵十は、火縄じゅうをばたりと取り落とした。青いけむりが、まだつつ口から細く出ていた。

学習課題	結末でのごんと兵十の気持ちはどうだったのか。			
問い	問い１　なぜ、ごんはいたずらばかりしているのか。	問い２　ごんはなぜ、つぐないを始め、くり返したのか。	問い３　「引き合わないな」と思ったのに、なぜその明くる日もつぐないを続けたのか。	問い４　結末でのごんと兵十の気持ちはどうだったのか。
◆読みの観点 ◇整理分析の方法	◆ごんの境遇や行動、内言に着目し、ごんの思いを想像する。 ・ひとりぼっちの小ぎつね ・行動「いたずらばかりしました」 ・内言「ちょいと、いたずらがしたくなった」 ◇ごんがした「いたずら」を整理し、ごんの境遇や人物像などと関連付けて気持ちを想像する。 ・いたずら好きな人物像と様々ないたずらをする様子の関連付け ・ごんに対する村の人々の見方	◆ごんがつぐないを始めたきっかけとなったところに着目し、ごんの気持ちの変化を想像する。 ・情景描写「いつもは赤いさつまいもみたいな元気のいい顔が今日はしおれて」 ・ごんの会話文 ・ごんが穴の中で考えたこと、内言 ◇ごんの行動や見たこと、会話、内言を比較して考えを深める。 ・いたずら好きな人物像といたずらをしてうなぎを取った場面の関連付け ・葬列を見ている場面とあなの中で考えている場面の関連付け	◆兵十と加助の話を聞くごんの行動や位置関係、内言、情景描写に着目し、ごんの思いを想像する。 ・情景描写「月のいいばん」 ・行動「かげぼうしをふみふみ」、「井戸のそばでずっと待つ」 ・会話「おれは引き合わないなあ。」 ・つぐないを繰り返すこと ◇ごんの行動や様子、情景描写など場面の移り変わりと結び付けて読んだり、友達と話し合ったりしてごんの行動の理由や気持ちについて考えを深める。 ・ごんの期待と引き合わない気持ちの比較	◆「ごん、おまいだったのか。」や「ぐったりと、目をつぶったまま」の言葉に着目し、兵十やごんの気持ちの変化を想像する。 ・ごんの行動 ・兵十の行動、会話 ・ごんと兵十の行動の比較 ・情景描写「青いけむりがまだつつ口から細く出ていました」 ・ごんの呼び方 ・ひとりぼっち ・視点（ごん視点から兵十視点へ） ・冒頭の語り ◇ごんや兵十の人物像やこれまでの行動の変化を関連付けながら、気持ちの変化を比較したり、つなげたりして考えを深める。 ・ごんの人物像やこれまでの行動との関連付け ← ・うなぎをぬすまれた場面とごんをうった場面の比較 ・土間のくりに気付いた場面と火縄じゅうを取り落とした場面の比較・関連付け ・「青い」けむりとごんや兵十の気持ちへの結び付け
児童の読みの例	Ｃごんは、ひとりぼっちだから、遊び相手がほしくていたずらをしている。 Ｃ兵十に友達がいるのがうらやましくて、自分も仲間がほしくていたずらをしている。 Ｃ「ちょいといたずらがしたくなった」のところから、その場の気分だったり、面白そうだなと思ったりしてやってしまっている。 Ｃごんはひとりぼっちだからこそ、かまってほしくていたずらをくり返ししている。 Ｃ村の人たちがごんのいたずらに迷惑していることに気付かず、ひとりで穴の中にいるより楽しいと思っていたずらをしている。	Ｃごんは、ひとりぼっちだから、遊び相手がほしくていたずらをしている。 Ｃ兵十に友達がいるのがうらやましくて、自分も仲間がほしくていたずらをしている。 Ｃ「ちょいといたずらがしたくなった」のところから、その場の気分だったり、面白そうだなと思ったりしてやってしまっている。 Ｃごんはひとりぼっちだからこそ、かまってほしくていたずらをくり返ししている。 Ｃ村の人たちがごんのいたずらに迷惑していることに気付かず、ひとりで穴の中にいるより楽しいと思っていたずらをしている。 Ｃ兵十のいつもは赤いさつまいもみたいな元気のいい顔がしおれているところから、自分がおっかあを死なせてしまったとごんは思ったから。だから、兵十に元気を出してほしくてつぐないを始めた。 Ｃ兵十のおっかあの死は、自分がいたずらをしたせいだから、一回のつぐないだけでは足りないからくり返し行った。 Ｃちょいといたずらをしたことが大変なことになってしまい、いたずらを反省してつぐないをしようと思った。 Ｃ自分と兵十がひとりぼっちということに親近感がわき、うなぎをとってしまったことを後悔してつぐないをしようと考えた。 Ｃつぐないを何度もしたり、置き方も丁寧になり、持っていく物が日に日に豪華になったりしているから、自分と同じひとりぼっちの兵十に対する思いが大きくなっている。	Ｃ兵十と加助の話を聞いても、つぐないをするほど、ごんはいたずらを後悔していたから。 Ｃ神様のしわざだと言われてもつぐないをするのは、自分がつぐないをくり返していることに気付いてほしい気持ちが出てきたと思う。 Ｃつぐないを何度もするうちに兵十への思いが大きくなったごんは、「兵十のかげぼうしをふみふみ」できるくらい兵十に近付いていることが分かる。 Ｃごんの兵十への気持ちも距離も近づいていることが分かる。 Ｃ自分がつぐないをしていることを兵十に気付いてほしい気持ちもあるし、たくさんのいたずらをしてしまったので気付かれたくない気持ちもある。	【兵十の気持ち】 Ｃいたずらばかりしていたごんだから、今回もいたずらをしに来たと思ったのに、違うと知って、ばたりと火縄銃を落としてしまうくらい、びっくりした。取り返しのつかないことをしてしまったと思っている。 Ｃ前の場面とごんの呼び方を比べると、ぬすっとぎつねーあのごんぎつねめがーごんというように、兵十がごんに対して怒っていた気持ちがなくなり、ごんに近付いた感じがする。 Ｃ青いけむりがまだつつ口からというところが兵十の悲しみややるせなさを表している。 【ごんは幸せだったのか】 Ｃ幸せではない。理由は、栗や松たけを持ってきたのは自分だと分かってもらえたが、その理由や仲良くなりたい思いまでは伝わっていないから幸せとは言えない。 Ｃ半々だと思う。結局うたれてしまった悲しい気持ちが青いけむりに込められているけど、一人ぼっちだったごんにとっては、兵十が「ごん」と呼んでくれて自分の存在に気付いてもらえて嬉しかったと思う。 Ｃ幸せだと思う。語り継がれているっていう事は、兵十が後悔や悲しみの気持ちを加助に伝えている。ごんの名誉を挽回することにもなるから、結果的には幸せなのかもしれない。